

## 古代末期とは何か？

——現時点でその研究状況をふりかえる——

足 立 広 明

### はじめに

西洋における古代末期とは何か。それはローマ帝国末期をいかに捉えるかに端を発した歴史概念であるが、同時に西欧世界の誕生やビザンツ世界やイスラム世界の形成とも関連して、古代とも中世とも異なる独自の価値を持った時代として構想されてきた時代概念である。最近では、その視界は東アジア世界にも及びつつあり、文化的、内面的な領域でも言語、宗教、ジェンダーなどに関連する各領域でその後のヨーロッパ、中東の社会的規範の形成された時代として注目され、数多くの研究が現れている。

西暦2世紀、地中海周辺世界はローマ帝国によって統合されていた。ところが、8世紀になるとこれが西北にフランク王国、小アジアとエーゲ海地域にビザンツ帝国、北アフリカからシリアはイスラーム帝国と、三つの勢力が鼎立する世界となった。太古からの多神教は—少なくとも表面上は—姿を消し、代わってキリスト教とイスラームの一神教が支配する世界となった。またアラブ人、スラブ人、ゲルマン人などが移動・定住して今日の民族分布の基礎が作られた。この間にいったい何が生じたのであろうか。

エドワード・ギボンやロストフツェフ、それにウォールバンク、ドッズに至る古代史家は、この時代を「ローマ帝国の衰亡」ひいては「古典古代」文明そのものの崩壊の時代と捉えた<sup>1)</sup>。しかし、アルフォンス・ドプシュ、アンリ・ピレンヌといった中世史研究の泰斗は、同じ時代に古代からの文化の継続と、

ヨーロッパ世界形成の道筋を読み取った<sup>2)</sup>。これらの歴史家の著作は今もなお読み継がれているが、それは彼らの著作が専門的な歴史研究の枠を超えて、同時代への問いかけを含んでいたからであろう。

移民や難民の問題に揺れ、女性や性的マイノリティの社会的位置づけや、人間が周囲の生態学的環境といかに共存するかが問われている現在、古代末期は再び現代的な相貌をもって立ち現れてきている。大きな発展を遂げた現在の古代末期研究の全体を概観することは単独研究者の手に余ることではあるが、現時点でのごく簡単な展望を試みたい。

## 1. 古代末期概念の発展

周知のように、「古代末期」とは 19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍したオーストリアの美術史家アロイス・リーゲルが古代とも中世とも異なる独自の様式を生み出した時代としたのが始まりとされる<sup>3)</sup>。しかし、現在の古代末期研究は、1970 年代にアメリカに拠点を移して以降のピーター・ブラウンの研究をひとつの画期とすると見て間違いのないところであろう。彼は 1967 年に最初の著書 *Augustine of Hippo* でその学的地位を確立した後、古代末期全体を広く見渡す著書を書こうと試みた<sup>4)</sup>。それが 1971 年の著書 *The World of Late Antiquity* であった<sup>5)</sup>。同書は当時としてはカラフルな図版と写真、それにマッチした斬新な叙述で専門外の一般読者も含めて大きな影響力を持つに至り、現在でも版を重ねて読み継がれる著作となった。

その大きな特徴は、ギボン以来の文明衰亡史観を批判し、五賢帝時代の 2 世紀からハルン=アッラシードやカール大帝の統治する 8 世紀末から 9 世紀初頭までの地中海世界の歴史を文化と社会の変容の時代と捉えるところにあった。その発想の基底にはアンリ・ピレンヌの *Mahomet et Charlemagne* があるが、ピレンヌがイスラームの登場をそれまでの古代文化を断絶させるものとしてネガティブに描くのに対して、ブラウンはイスラームを古代ローマとササン朝ペルシアの文化を継承し、キリスト教が開始した一神教的変革を完成させるもの

として高く評価した。イスラームへの高評価は現在ではさほど珍しいことではないが、西洋古代の世界を地中海だけでなくイラン高原も加えて捉え、その双方の文化を受け継いで最初の高度な中世文化を完成させた者として、カール大帝（シャルルマーニュ）ではなくハルン=アッラシードに栄冠を与えたのは、その当時としては斬新で大変先見の明のあったものと言えよう。

同書でさらに重要と思われるのは、その宗教文化史的な側面である。これは同じく1971年に彼が *Journal of Roman Studies* 誌上に発表した論文 *The Rise and Function of the Holy Man* においてより鮮明であるが、ブラウンはキリスト教修道士の起源となるエジプトやシリアなどの砂漠の禁欲的修行者（ascetics）を古代末期の社会変容の担い手として高く評価した<sup>6)</sup>。彼はこれもその当時としては新しい考古学の成果と文化人類学の知見を応用し、砂漠の「聖人」（Holy Man）は抑圧的な後期ローマ帝国体制からの逃亡者ではなく、成長する古代末期の村落社会の調停者として登場したと考えた。彼らは利害関係の衝突する個人と個人、共同体相互、村落と都市の間に新しい権威ある神の代理人として介在し、これをまとめ上げたのだという。彼はこの考えを1978年の *The Making of Late Antiquity* などでさらに詳細に展開した<sup>7)</sup>。

「聖人」は人間の定住地の外で「悪霊」、すなわち伝統的な神々や現実世界の摩擦や葛藤の象徴と戦い、これに打ち勝つ神に接近した人として定住地に戻り、伝統的価値観のゆらぐ古代末期社会の人々に確かな指針を与えることになる。そして、「聖人」や聖遺物の起こす「奇蹟」を求めて各地からの巡礼が西方からやって来る。彼らの持ち帰った聖遺物は持ち帰った先でも「奇蹟」を起こし、西方における信仰の核となっていく。1981年の *The Cult of the Saints* は、東方からの影響を受けて広がるこの西方での聖人信仰を扱うことで、鮮明なイメージを学界に与えた<sup>8)</sup>。

やがてローマ帝国の政治的統合は崩れるが、「聖人」信仰とキリスト教修道制は残り、それどころか一度も帝国に組み込まれたことのない領域、北はアイルランドから南はエチオピアに至るまで、また東方でもペルシア、アラビア半島に至る広がりを見せる。ブラウンはそこにさまざまな形で古代文化が変容

しつつ継承され、それぞれの地域の中世を育む要因となる過程を読み取るのである。

こうしたブラウンの一連の研究に触発され、古代末期研究は爆発的な発展を遂げ、修道運動や巡礼、聖人信仰の役割を中心に数多くの研究が積み上げられるようになった。1988年にブラウンは大著 *The Body and Society* で聖人と修道士に関連して古代末期の性と禁欲の問題を取り上げ、これもその後の女性聖人や巡礼、ジェンダー、セクシュアリティに関係する数多くの研究を触発することとなった<sup>9)</sup>。

ただし、現在の古代末期研究の全てがブラウンの影響で生み出されたとみるのも早計である。セバスチャン・ブロックのシリア語研究などは現在の古代末期研究で非常に重要な柱の一つであろうが、直接にはブラウンの影響で始まったものではない<sup>10)</sup>。近年研究の進んでいる賞賛演説の研究などもまた現在の古代末期研究で重要な位置を占めるが、ブラウンが切り開いたというわけではない。また、ブラウン自身もアンリ・イレネ・マルーやサント・マツァリーノ、アーノルド・ジョーンズらの優れた先行研究の影響を受けている<sup>11)</sup>。

共通するのは、伝統的な後期ローマ帝国史が見直され、それまで無価値なもの、どこか社会の分裂や崩壊を促進するものとみなされてきたものに価値を見出し、古代末期を「衰亡」ないし「停滞」の時代ではなく、文化や社会の「変容」の時代として積極評価しようとするところであろうか。シリア語はギリシア語やラテン語と同じく高度な文化言語であり、社会を分断する民族的な言語でなく、むしろ諸社会を相互につないでいくものとして再評価されてきたのであるし、賞賛演説も無意味な追従でなく、社会関係を読み解く重要な史料として見直されてきたのである。

ブラウンが影響力を持ち得たのは、単に彼が巧みな文体で表現したからではなく、その言葉が学問上の時代の要請を見抜いた、最も的確なものとなっていたからであろう。筆者が *The Making of Late Antiquity* の拙訳を試みた際にもそれは感じることができた。彼は自身と同じアイルランド出身でオックスフォード大学の偉大な先達であるドゥズの名著 *Pagans and Christians in an Age of*

*Anxiety* を念頭に、ほぼ同じ史料を用いながら全く異なる解釈を提示した。

すなわち、ドッズが五賢帝時代からコンスタンティヌス帝時代に至る社会の心性史的变化を、市民が合理的判断能力を喪失して宗教に傾倒していく「不安の時代」の道筋として読み解くのに対して、ブラウンは同じ時代をその時代の人々なりに合理的な判断に基づき、明確な指針を見出していく「野心の時代」として読み解く。史料と先行研究に向き合う緊張感の中で紡がれる言葉に、探していたこの時代の解読の鍵を見出す思いをしたのは筆者だけではないであろう。

## 2. 古代末期研究の現在と帝国の衰亡

以上、ブラウンの70年代の研究を中心に古代末期研究の離陸を素描してみたが、現時点ではこれほどのように評価できるのであろうか。おおよそ全ての学問研究がそうであるように、ブラウンを中心とする近年の古代末期研究も、当初の「楽観的」な見方に対しては現在様々な批判が出てきている。それは後述のようにこの間見捨てられた観のある帝国西方の政治的解体に関するものだけではない。ブラウンの修道「聖人」に対する見立て自体に関しても、早い段階からその実証性が薄いことや、「聖人」の台頭は社会の成長を背景にしたとばかりは言い切れない点などが彼自身の薫陶を受けた研究者から指摘され、ブラウン自身もその後ある程度の軌道修正をしている<sup>12)</sup>。

しかし、古代末期の宗教文化史に関係する研究はこの間も増大している。それは、社会の中のイメージと記憶、コミュニケーションに関する研究がほかの時代と同様古代末期でも多くなり、そのなかで聖人信仰や巡礼、それに天上の世界と地上の世界の関係についての人々のイメージの変化、それらに絡むさまざまな儀礼に関する研究は非常に重要な要因となるからである。古代末期に現世よりも絶対的な神とそれに連なる魂を重視する傾向が強まった事実是否定できないのであり、しかもそれがキリスト教やイスラームの成立と絡んでその後の中東やヨーロッパの諸社会の文化規範を決定づけているとなれば、古代末期

の宗教文化史は、単にほかの時代でもさかんな社会史や心性史をこの時代にも応用してみたというにとどまらない重要性を持ち、今後もさらに拡大・深化していくことだろう。

このような宗教文化史的な分野が継続的に拡大する一方、21世紀に入ってから古代末期研究では、上述したようにこの間等閑視されてきたローマ帝国西方の解体をいかに捉えるかという問題が再び大きな話題となった。ブラウン以降の古代末期研究は前章で述べたように東方の宗教文化史研究が中心となったため、西方の帝国統治体制の解体についてほとんど触れることがなかった。これにはグレン・バワソックが宣言したように、帝国の衰亡を語ることで自分が時代遅れとなったと見る風潮が強まったことも背景にあるだろう<sup>13)</sup>。

この間の西方に関する研究としては、帝国の統治体制そのものでなく、そこへ移動・定住した「ゲルマン人」とされる人々を扱ったウォルター・ゴッフアートのアコモデーション理論や<sup>14)</sup>、彼もその後加わったヨーロッパ財団の共同研究 *The Transformation of the Roman World* シリーズ<sup>15)</sup>が有名である。ゴッフアートのアコモデーション理論とは、ライン・ドナウの北方に住む「ゲルマン人」とされる人々の帝国内への平和的な移住を提唱するもので、彼らは破壊をこととする「蛮族」ではなく、帝国と条約を結んで移住し、現地住民と平和的な関係を構築してポスト・ローマ期の諸王国を建設したというものである。彼のこの理論は1990年代の上述ヨーロッパ財団による研究にも大きな影響を与えた。

今世紀に入ってから古代末期研究への批判は、遠景にブラウンを念頭に置きつつも、直接的にはこのゴッフアートとそれに続く上述ヨーロッパ財団の1990年代の研究を批判するものであった。その先頭に立ったのがブライアン・ウォード・パーキンズで、彼は2005年の *The Fall of Rome and the End of Civilization* において、考古学的なデータから見る限り5世紀初頭の帝国西方の「蛮族」による破壊は徹底的なものであり、90年代の研究はEU拡大期における楽観的な願望の産物であるとして批判した<sup>16)</sup>。また、その背景には近年の多文化主義があり、これが文化の優劣や危機や衰退に言及しない古代末期研究の主潮とな

っていると考えている。一時期はヨーロッパ財団の研究に参加していたピーター・ヘザーもまた現在では批判に転じて、「蛮族」による西方の破壊を強調している<sup>17)</sup>。

こうした動向は現在では直ちに我が国にも紹介され、2008年の西洋史学会シンポジウム<sup>18)</sup>のテーマの一つともなり、その延長上に南川高志氏は『新・ローマ帝国衰亡史』<sup>19)</sup>を、同じく井上文則氏は『軍人皇帝のローマ—変貌する元老院と帝国の衰亡』<sup>20)</sup>を上梓した。この間南雲泰輔氏は数多くの書評で90年代以降の古代末期研究の動向を明瞭に伝え、また古代末期や帝国の衰亡を直接扱わないが、『ローマ帝国の東西分裂』で独自の見解を示した<sup>21)</sup>。これらの日本人研究者の共通の特徴は、ウォード＝パーキンスが「蛮族」に帝国崩壊ないし文明の衰亡の原因を求めるのに対し、帝国の不寛容さの増大や体制の不備に原因を求めるところにあると言えるであろうか。

南川氏の上述書を読むと、『衰亡史』と銘打たれつつも、じっさいには4世紀末のユリアヌス帝からウァレンティニアヌス帝ごろまで帝国が強勢を維持していることに驚く読者も少なくないであろう。ところが、その後帝国はわずか30年ほどで、少なくとも西方においては解体してしまう。ライン・ドナウ地域の「蛮族」とされる人々を積極的に取り込むことで「北辺のローマ帝国」はその強さを保持できたのに、最終段階で不寛容さを増大させたことに原因があるという。井上氏の場合はこれとやや違って、同じく「北辺の武人皇帝」が帝国を立て直すが、彼らに帝国支配層の元老院身分の人々の影響が及ばなくなったことに原因を求めている。いずれにしても、元首政の政治体制の歴史が詳細に語られている以上、その帰着点として帝国の解体過程がどのようであったかの解明は避けられない大きなテーマであり、我が国で独自の研究が高い水準で進められたことは誇ってよいことであろう。

ただ、不寛容さや元老院の影響の途絶が原因であるとして、それらが具体的にどのように現実の政治体制の崩壊と結びついているのか、この点はまだ抽象的な推論にとどまっており、今後の研究の進展が待たれるように思われる。また、我が国の場合、新しい衰亡論とリンクする形で西方の研究が著しく進展す

る一方、古代末期研究自体は不十分なままであり、バランスを欠いている。ウォード=パーキンズの批判が先に紹介される一方、その批判対象のゴッファートのアコモデーション理論や90年代のヨーロッパ財団の研究は批判を通じて初めて認知されるという逆転現象にそれは象徴的に現れていると言えよう。

ゴッファートや西方の諸研究について残念ながら筆者には十分解説する力量はないが、それでもそれらがただ単に「ゲルマン人」とされる人々の平和的な移住を語るだけのものでないことは容易に理解できる。それらの研究の柱となっているのは、「ローマ人」と「ゲルマン人」の二項対立ではなく、ライン、ドナウの両岸に住む人々の社会的、経済的な交流とそれによる長期的な「変容」の過程なのである。じっさい、両河川北方に住む人々を「ゲルマン人」と一括せず、それらの人々と「ローマ人」との多様な関係のなかから、あるいはそれらの人々が新しい「ローマ人」となることで「北辺のローマ帝国」が生み出されたとする南川氏の視点は、ウォード=パーキンズよりもゴッファートの2006年の著書 *Barbarian Tides* にずっと近い<sup>22)</sup>。

また、5世紀初頭の帝国西方における一連の破壊的事件でもって「ローマ帝国滅亡」、ひいては「文明の衰亡」を言うのは妥当なことなのであろうか。410年のローマ略奪の「下手人」である西ゴート人にしても、アキテーヌへの定住からヒスパニア攻略、さらにヒスパニアに落ち着いてからイスラームに征服される711年までの長い歴史があり、その文化的発展は見逃せない。東ゴートやヴァンダルなどの動静も同様である。

彼らは地上を無人の荒野にする津波ではなくて人間なのであり、ローマ帝国の内側にいる人々も加えつつ形成された集団ではなかったのか。こうした人々は何を動機として侵入し、その後どうなっていったのか。西方が忘れられているので目を向けると言うのであれば、この点の解明が必要であらうし、その点ではウォルター・ポールなどの上述ヨーロッパ財団の研究の中心メンバーであった人々の動向は今後も目が離せない<sup>23)</sup>。

また、東方に新しく再編されたローマ帝国が存在していたことも忘れてはならない。上述の諸集団のほか、フランク王国やローマ教皇権などのその後の形



成も、いずれも東方に存在するローマ（ビザンツ）を意識しつつ、これと直接、間接の関係を取り結びながらのものであったし、イタリア半島やシチリア、北アフリカなどはユスティニアヌス帝により奪回され、北アフリカはイスラームの進出まで、イタリアの一部やシチリアはその後長くローマ帝国の領土であり続け、中世シチリア王国やヴェネツィア共和国の形成にまで影響は及んでいる。

それから、これまで見てきた行論からも分かるように、ゴッフアートやヨーロッパ財団の研究とブラウン以降の宗教文化史的な研究では方法も扱う地理上の範囲も異なっており、前者への批判でもって古代末期研究批判とするのは相当な無理がある。強いて共通点を探すならその「楽観」性と「多文化主義」ということになろうが、これまた何を「楽観」、「多文化主義」とするのか曖昧で、多義的で印象論的な批評とならざるを得ない。古代末期研究の「楽観」論の背景には 1990 年代の拡大 EU 成立を見るのが通説化しているが、70 年代にアメリカで発展したブラウン以降の古代末期研究の「楽観」論にはこれはあてはまらない。ウォード=パーキンズが主たる批判対象としたゴッフアートのアコモデーション理論に限定しても、これは 1980 年公刊のものであり、ヨーロッパ財団の研究は多様で一概に「楽観」的と括することはできない。

私見では近年の古代末期研究の淵源は、まず 1970 年前後の世界における文化と社会の価値観の大きな変動の時代、さらにさかのぼって二つの世界大戦に前後する時代、個人の歴史家の名前ではピレンヌやドブシュに至ると思われる。これらの歴史家に古代末期に関心を抱かせたのは、ヨーロッパの価値観の大きな変動であった。ブラウンが古代末期論を展開しはじめた 1970 年代のアメリカもまた、ベトナム戦争を経てあらゆる価値観が問い直される時代であった。ピレンヌとブローデルの理論に文化人類学の知見を加えたブラウンの研究が説得力を持ち得たのも、それを受け入れる時代的要請があったからであろう。古代末期研究は、こうした長い大きな歴史の問い直しの産物であって、新しい衰亡論が提示されたからといって、すぐに頓挫するとは思われない。

その長い問い直しの作業には、これまで視界に入らなかったファクターを入

れて歴史を再構成するということが含まれており、そこで文化の多様な営みに時に「楽観的」に描くことがあったのかもしれない。しかし、この作業を通じて開かれた多様な過去を見る窓を閉ざすことはあってはならないし、じっさいもはや閉ざすことはできないだろう。地中海の歴史はイラン高原やアラビア半島と、ライン・ドナウの南側はその北側と連動していたのであり、人々はあの世とこの世を結ぶイメージのなかで生きていたのであり、ギリシア語とラテン語の傍らでシリア語やコプト語が人々を結びつけていたのであり、女性たちを主人公とした伝記が次々と書かれたのである。

とくに筆者が重要であると考えているのは、古代末期研究が「衰亡」に対して「成長」ではなく、「変容」を対置してきたという点である。これまでの古代末期研究の「楽観」的な見方のなかでは、「変容」が「成長」に近い意味で用いられてきたとしても、それでもそれはニュートラルな表現なのであり、これをも取り去るべきであるとは思われない。

じっさい、現在の古代末期研究は、西方の政治的解体過程もまた古代末期の変容過程のひとつとして包括しつつ進展しているように見える。すなわち、帝国は解体したが、普遍宗教がその帝国の領域を超えて拡大した時代とみる視点である。そして、この場合の帝国とは西方のローマ帝国に限らないし、また宗教もキリスト教に限定されない。次にこの点についてさらに考察してみよう。

### 3. 古代末期：宗教的コモンウェルスの時代

複雑に錯綜する現在の古代末期研究に、それでもなお一定の見通しを持つとするなら、それはどこにあるのか。2010年の *The Oxford Handbook of Late Antiquity* を紐解くと、その導入部分担当のエルヴェ・アングルバルが、その方法のひとつは、やはりこの時代の心性を見ることであり、それが古代末期に心理学的な一体性とでも言うべきものを与えることになる<sup>24)</sup>と述べている。

もちろん、そのような一体性を見出そうとすること自体がさまざまな困難を呼び起こすであろうし、「ローマ文明」といった統合された形態はそこにはも

はや見出せない。ただ古代末期をみると、キリスト教とユダヤ教、ゾロアスター教、マニ教、新プラトン主義、イスラームの諸宗教が同時代的に併存し、神や真理の概念を共有していたことが史料から理解できる。アングルバルはこの共有状態に注目し、均質さと集団的な凝集性を連想させる「共通する思想」(common ideas, idées communes)の語を避け、「共有された思想」(shared ideas, idées partagée)という言葉でこの状況を表現する。そして、古代末期とは、a common civilization (un civilization commune)ではなく、a shared commonwealthの時代であったと捉えるのである<sup>25)</sup>。日本語にしてしまうと common と shared の相違は理解しにくいだが、一定の規律の下にある学寮ではなく、いろいろな人が共有するシェアハウスといったところであろうか。

この考えが果たして一体性を与えるかは不明であるが、たしかに古代末期のユーラシア大陸西部においては、人間の魂の故郷は清浄な天にあり、地上世界とそれに属する肉体は穢れているという考えが地域や宗教を越えて広まっていた。キリスト教、ゾロアスター教、ユダヤ教、マニ教、新プラトン主義などが同時代的に並列し、いずれも古代末期にそれぞれの聖典を編纂し、神学体系の完成を目指した。しかも、それらは相互に無関係ではなく、お互い相手のテキストに神やこの世界の真理について何が書かれているかを意識しつつ、それぞれが真実と信じる言説を紡ぎだしていたのである。

キリスト教の聖書正典確立と国教化は4世紀末であり、同じく4世紀から6世紀はアタナシオスやアウグスティヌスなどの活躍した教会史上の教父時代であり、正統信仰を定めるために公会議が開催された。ユダヤ教は非常に古い歴史を誇るが、タルムードのパレスチナ版が編纂されたのは4世紀末、バビロニア版は6世紀末で、古代末期のローマ帝国とササン朝の統治下においてであった。またゾロアスター教もその開祖ザラスシュトラは前10世紀の人とも言われるが、聖典アヴェスタ編纂はササン朝期であり、ローマ帝国のキリスト教への対抗関係があったと思われる。マニ教に至っては教祖マニ自身が3世紀に生きた古代末期人であり、キリスト教、ゾロアスター教、仏教を取り入れてその経典は地中海から9世紀の中央アジアにまで拡大した。また、プロティノス、

イアンブリコスに代表される新プラトン主義の思想が開花したのも古代末期である。

これと類似した現象はヒンズークシ山脈のむこう側でも生起していた。東アジア世界でもローマ帝国とほぼ同時代に繁栄した秦漢帝国が3世紀に解体し、魏晋南北朝の分裂の時代を迎えていた。「ゲルマン民族の移動」と同じ頃、中国華北でも五胡十六国の混乱の時代となって、多くの流民が発生していた。しかし、この帝国の解体の時代に、インドからヒンズークシ山脈を越えて西域経由でもたらされたもうひとつの普遍宗教である仏教が栄えることになった。また、仏教の影響を受けつつキリスト教の修道士のように世俗を離れて生活する道教修行者や新プラトン主義者のような竹林の七賢が現れた。

いずれにしても、古代末期には社会の前面に宗教が押し出されてきた。古代末期研究で宗教文化史的アプローチが依然優勢なのは、帝国が解体してあとは宗教ぐらいしか残っていないといった後ろ向きの理由ではなく、時代の趨勢がそのようであったからだと思われる。ペリクレスの時代のアテナイや、アウグストゥスの時代のローマでも人々は熱心に宗教を信じていた。しかし、この二人がポリスの成員、市民の代表としてふるまったのに対し、古代末期においては皇帝は神の代理人であり、アウグスティヌスもマニもムハンマドも、まずは神と向き合う個人であった。そして、共同体や国家はそうした個人の集合体として意識されたのである。

普遍的な宗教が東西で同時代に拡大した背景には、人々の移動や交流、社会や経済の変化があると思われるが、そのためには伝統的な西洋史や古代オリエント史、中国を中心とした東洋史、それにイスラーム史の枠を越えた学際的な研究が必要である。そして、このような領域横断的な視野を開こうとするものこそ古代末期研究なのである。

#### 4. 古代末期：女性聖人の時代

最後に近年の古代末期研究から二つの視点を簡単に紹介する。いずれも筆者

が長年手がけているテクラ崇敬に関連するが、ひとつには小アジア・イサウリア地域社会のマイクロ・エコロジーに関するギュンダー・ヴァリンリオグルの研究である。彼女は近年の衰亡を巡る議論で、やはりブラウンの視点に立つとしながらも、ブラウンがブローデルの静態的な長期持続モデルに依拠したのに対し、ホーデンとパーセルの理論を応用しながら、地域社会が周囲の環境と動態的に関わるマイクロ・エコロジーの視点を明示する<sup>26)</sup>。

ブラウンの古代末期見直しの一つの柱となったのは、シリア北部のアンティオキア郊外の農村村落に関するチャレンコの1950年代の広汎な考古学的調査で、オリーブや葡萄酒の遠隔地貿易のための商品作物で、元首政時代よりも古代末期にむしろ繁栄していたと報告した。聖シュメオンなどの砂漠の聖人がまさにこの地域から成長したことから、彼らは抑圧的体制下で急迫した社会からの逃亡者でなく、むしろ成長する自立的農村の社会的調停者であったとする視点が生まれた<sup>27)</sup>。

小アジア南東部のイサウリア地域は北部シリアに近く、似たようなパターンをたどる。しかし、イサウリアはシリアよりもずっと物質的に貧しく、商品作物も輸出していたが、山岳地の放牧民が都市内部にも訪れ、皮革製品などを交易していたし、日常使用の土器なども粗末なものであった。しかし、ヴァリンリオグルはこの「貧しい」状態こそが逆に強みなのであり、周辺の自然的、人的環境の変化に柔軟に対応しながら、立派な教会建築や遠隔地交易用の陶器などが放棄されても共同体が維持される基盤となると考えている。

近年の古代末期研究が新たな「衰亡」の議論に対応できるようになったのは、考古学の進展によるこのような細部にわたる復元が可能になったからということもある。そして、このような知見は、社会がダウンサイズしていくときにも人間は文化と社会を維持、継続させていくのだということ、そしてその際どのように変容しつつ継続させていくのかということまでも示唆している。

このイサウリア地方の都市セレウケイア近郊にハギア・テクラ聖堂を中心とする聖地を持つに至ったテクラ崇敬と、古代末期の女性聖人について最後に一瞥しておこう。

ブラウンに従えば古代末期は砂漠の修道者を社会の模範とする聖人の時代であったが、その聖人は男性に限定されなかった。それは、数多くの女性修道者、女性巡礼の行き交う女性聖人の時代でもあった。彼女たちは世俗世界においては得られない財産処分や場所の移動、それに思想表明の「自由」を宗教活動のなかで獲得し、社会的にも大きな影響力を持った。また、これはキリスト教に限定された現象ではなく、ヒュパティアのような女性哲学者も同様の一つである神の真理を探究して名声を博する時代であった。

このなかで、多くの古代末期の女性聖人伝に一定の型を与え、キリスト教女性信徒の鏡と鑑とされたのが聖書外典『パウロとテクラの行伝』の主人公テクラであった。小アジア・イコニオンに生まれた彼女は、実母と実母の勧める婚約者を捨てて使徒パウロに従い、旅に出る。ピシディアのアンティオキアに入った彼女に町の有力者が言い寄るが、パウロは彼女を保護せず立ち去り、彼女は自身で言い寄る男を撃退せねばならない。野獣刑に処せられた彼女は闘技場のなかで女性支持者の見守るなかでイエスに誓って自己洗礼し、許された後パウロに事後報告の後宣教の旅に出て、セレウケイア近郊で没する。そしてこの地がテクラの聖地として発展していくことになる<sup>28)</sup>。

テクラがパウロに従っているように見えることから、この物語の表層部分に教会男性指導層のプロパガンダ的な意図を読み取ることも可能である。しかし、テクラがパウロから離れ、女性群衆に支持されて自己洗礼し、宣教するに至る部分をみると、口頭による女性のキリスト教伝統が原型となっている可能性もあり、1980年代から現在に至るまで数多くの研究がなされてきた。いずれにしても、この物語は古代末期の女性会衆、読者に人気があり、それは女性たちがテクラのことを知っているという前提で教父たちが説教を行っていることから理解できる。私見では彼女はパウロに従ったのではなく、パウロに導かれてイエス自身に至ったのであると考えているが、これは別稿としたい。

テクラに関する最新の研究としてスーザン・ハイレンの *A Modest Apostle* を挙げるができるが、彼女はこのなかでこれまでの研究の世俗既婚女性と独身禁欲女性との二項対立的な図式を批判し、古代世界の女性は従属的な立場に

はあったが、それでも社会的活動を通じて公的舞台上に姿を現し、所属する共同体のために貢献していたと考えている。テクラの物語はこうした公的舞台上に姿を現す女性を体現したものであり、それ故に世俗の既婚女性からも支持され、古代末期に至ってますます発展したというのである<sup>29)</sup>。

ただし、それならば禁欲的な独身生活を改めて行う必要性はどこにあるのか、それが対立や摩擦を生む反面、新しい生活としてアピールしたのはなぜか。このあたりが探求すべき課題として残されているようであるが、古代末期は女性たちが社会に関与しつつそれを変容させていった時代であることは間違いないところであろう。古代末期女性史で数多くの研究を上梓してきたケイト・クーパーは、女性は帝国解体や民族移動のような大きな歴史の流れを押しとどめることはできなかったが、その歴史の渦中で人と人をつなぎ、コミュニティを作り、次世代に文化を伝達したのでであると述べている<sup>30)</sup>。

## おわりに

以上、雑駁な形ではあるが古代末期研究の現状と意義について筆者なりの見方で述べてきた。毎年洪水のように出版される古代末期関係の著書や論文の全てに目を通すことは、最初に述べたようにもはや単独研究者には不可能であり、ましてや筆者の手に負えるものではない。しかし、古代末期とは帝国の解体、縮小の時代にも人間が文化と社会を継続させ、新しい形に変容させていくことができたことを示す時代であるという以上の展望は、一定の確証を与えるものであるとも考えている。

古代末期は現代に至る民族・宗教分布の根幹が形成され、社会の内面、規範意識においても現代につながるものが生み出された時代である。そこから放たれるメッセージは、今後も常に現代的な意味を持って立ち現れるのであろう。

## 注

- 1) Edward Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, London, (vol.

- I, 1776 ; vols.II, III, 1781 ; vols.IV, V, VI, 1788-1789). 村山勇三訳『ローマ帝国衰亡史』全10巻、岩波文庫。また中野好夫ほか訳『ローマ帝国衰亡史』全10巻、ちくま学芸文庫。Michael Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*. NY., 1926. 坂口明訳『ローマ帝国社会経済史』上下巻、東洋経済新報社、2001年。Frank William Walbank, *The Decline of the Roman Empire in the West*, London, 1946. 吉村忠典訳『ローマ帝国衰亡史』岩波書店、1963年。E. R. Dodds, *Pagan and Christian in an Age of Anxiety: Some Aspects of Religious Experience from Marcus Aurelius to Constantine*, Cambridge, 1963. 井谷嘉男訳『不安の時代における異教とキリスト教』日本基督教団出版局、1981年。
- 2) Henri Pirenne, *Mohammed and Charlemagne*, 1937. 佐々木克巳・中村宏訳『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ』、創文社、1960年。Alfons Dopsch, *Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung, aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Große*, 1918-20. 野崎直治訳『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎』創文社(名著翻訳選書)、1980年。
  - 3) Alois Riegl, *Spätromische Kunstindustrie*, Wien, 1901. 井面 信行訳『末期ローマの美術工芸』中央公論美術出版、2007年。
  - 4) Peter L. Brown, *Augustine of Hippo: A Biography*, London, 1967. 出村和彦訳『アウグスティヌス伝』上・下巻、教文館、2004年(2000年改訂版よりの翻訳)。
  - 5) Peter R. L. Brown, *The World of Late Antiquity: AD 150-750*, London, 1971. 宮島直機訳『古代末期の世界』刀水書房、2002年、改訂版2006年。邦訳は抄訳。
  - 6) Peter R. L. Brown, "The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity", *The Journal of Roman Studies*, 61 (1971), 80-101.
  - 7) Peter R. L. Brown, *The Making of Late Antiquity*, Cambridge, Massachusetts, 1978. 足立広明訳、『古代末期の形成』、慶應義塾大学出版会、2006年。
  - 8) Peter R. L. Brown, *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago, 1981.
  - 9) Peter R. L. Brown, *The Body and Society: Men, Women, and Sexual Renunciation in Early Christianity*, NY., 1988.
  - 10) Sebastian Brock, *Syriac Perspectives on Late Antiquity*, London, 1984. ほかにも非常にたくさんの著書、論文がある。
  - 11) Henri-irenee Marrou, *Décadence romaine ou Antiquité tardive?*, Paris, 1977 ; Santo Mazzarino, *La fine del mondo*, Milano, 1959 ; Arnold H. Jones, *The Later Roman Empire, 284-602: A Social, Economic, and Administrative Survey*, Oxford, 1964.
  - 12) この間の事情については、ブラウン自身が語っている。P. Brown, 'SO Debate: The World of Late Antiquity Revisited', *Symbolae Osloenses* 72, 5-30.
  - 13) Glen W. Bowersock, 'The Vanishing Paradigm of the Fall of Rome,' *Bulletin of the*



- American Academy of Arts and Sciences 49-8, 29-43.
- 14) Walter Goffart, *Barbarians and Romans, A. D. 418-584: The Techniques of Accommodation* Princeton, 1980.
  - 15) オランダ、ライデンから出版された Transformation of the Roman World シリーズ。本稿との関係でウォード=パーキンスが挙げているのは Walter Pohl, ed., *Kingdoms of the Empire: The Integration of Barbarians in Late Antiquity*, (Leiden, 1997)。ただし、ウォード=パーキンス自身が注でも述べているように、同書ではゴッフアートに賛成のほか反対の立場の論文もあり、また同書以外にも非常に多岐にわたるシリーズが公刊されている。
  - 16) Bryan Ward-Perkins, *The Fall of Rome and the End of Civilization*, Oxford, 2005. 南雲泰輔訳『ローマ帝国の崩壊：文明が終わるとのこと』白水社、2014年。
  - 17) Peter Heather, *The Fall of the Roman Empire*, Oxford, 2005.
  - 18) 「西洋古代史における『衰退』の問題」論点2：「ローマ帝国の「衰亡」とは何か」司会 南川高志（京都大学）、基調報告井上文則（筑波大学）「ローマ帝国衰亡論の現在」、コメンテーター 大月康弘（一橋大学）、加納 修（名古屋大学）、於島根大学。
  - 19) 南川高志『新・ローマ帝国衰亡史』岩波新書、2013年。
  - 20) 井上文則『軍人皇帝のローマ—変貌する元老院と帝国の衰亡』講談社選書メチエ、2015年。
  - 21) 南雲泰輔『ローマ帝国の東西分裂』岩波書店、2016年。同氏の論評、書評は数多くあるが、さしあたり次のものを挙げておく。「英米学界における「古代末期」研究の展開」『西洋古代史研究』第9号、2009年、47-72頁、「〈書評〉 Gillian Clark, *Late Antiquity: A Very Short Introduction*」『西洋古代史研究』第12号、2012年、55-61頁。
  - 22) Walter Goffart, *Barbarian Tides: The Migration Age and the Later Roman Empire*, Philadelphia, 2006.
  - 23) 次の書が本年10月に Cultural Encounters in Late Antiquity and the Middle Ages シリーズの一冊として Brepols Publishers より刊行予定。Walter Pohl, *The Barbarian Challenge: Making Sense of the Other in Early Medieval Texts*.
  - 24) Hervé Inglevert, “Introduction: Late Antique Conceptions of Late Antiquity,” in: Scott F. Johnson ed., *The Oxford Handbook of Late Antiquity*, Oxford, 2012, pp.3-27.
  - 25) 古代末期を宗教的コモンウェルスと捉える見方を提起したのは次の書である。Garth Fowden, *Empire to Commonwealth: Consequences of Monotheism in Late Antiquity*, Princeton, 1994.
  - 26) Gunder Valinlioglu, *Rural Landscape and Built Environment at the End of Antiquity: Villages of Southeastern Isauria*, Ann Arbor, 2008.

- 27) Georges Tchalenko, *Villages antiques de la Syrie du Nord : le massif du Bélus à l'époque romaine*. Paris, 1953.
- 28) Lipsius, H. A., et M. Bonnet, *Acta Apostolorum Apocrypha*, Leipzig, 1891. 青野太潮訳「パウロ行伝（パウロとテクラの行伝）」日本聖書学協会編『聖書外典偽典』7巻『新約外典』II、教文館、1976年。
- 29) Hulen, Susan, *A Modest Apostle : Thecla and the History of Women in the Early Church*, Oxford, 2015.
- 30) Cooper, Kate, “The Bride of Christ, the “Male Woman” and the Female Reader in Late Antiquity,” in : Bennett, Judith and Ruth M. Karras, eds., *The Oxford Handbook of Women and Gender in Medieval Europe*, Oxford, 2013, pp.529-544. 彼女のさらに詳しい議論の展開は以下の書を見よ。Cooper, Kate, *The Fall of the Roman Household*, Cambridge, 2007.